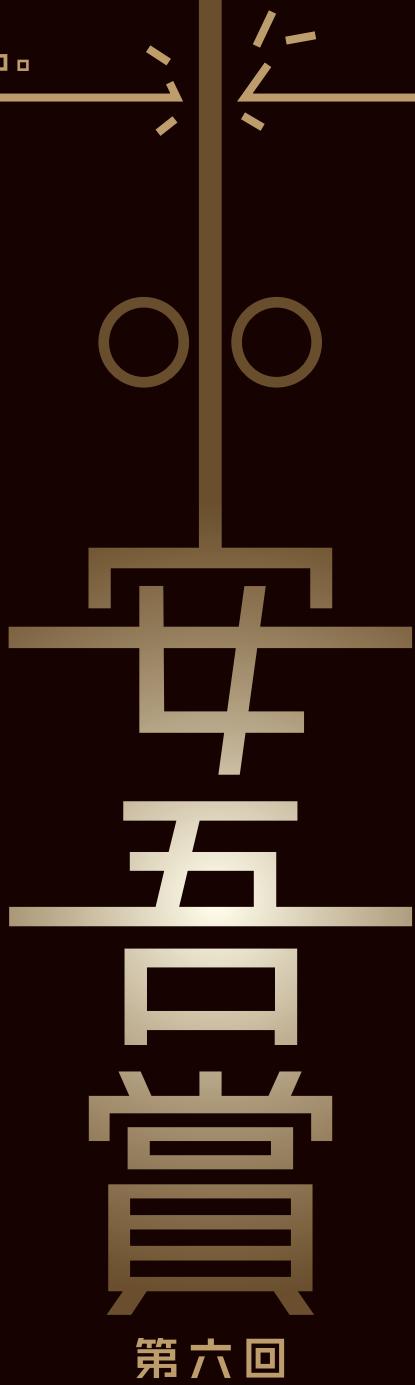


安吾賞とは生きざき賞である。



第六回

新潟市

Ango AWARDS 6TH

安吾の覚悟

どうしても書かねばならぬこと、書く必要のあること、ただ、そのやむべからざる必要にのみ応じて、書きつくされなければならぬ。

日本文化私観



アラーキーは現代の最大の戯作者

立花 隆

荒木経惟を写真家としてしか知らない人も多いだろうが、実は荒木の才能の半分は文章にある。

荒木には写真全集(平凡社・全八巻)もある。活字の代表作には『東京日記』(出窓社)と『包茎亭日乗』(イースト・プレス)がある。これらの文章、日記のスタイルで書かれ、有名詞が沢山入り日付入りのスナップ写真まで入っているから、いかにも本物ボイが、実は「虚々実々」の作品であると本人が明かしている。「この写真なんか、虚と実がまぜこぜだし日付も嘘だし、何が嘘だかホントだかわからないでしょ。アタシの場合嘘とホントを見極めよう、追究しようつていう姿勢がない」(『私日記・過去』)「日記で文学とかアートしてるとか、女とやったことにしようとか、日記をよく書く奴は絶対に嘘つきだし、続けてるうちに嘘が平気でけるようになる」(『私日記・世紀末』)あの最も有名な「陽子」の恋愛旅行の写真にしても、「陽子という女を撮るっていうんじゃなくて、彼女を素材に写真の勉強をしてた。彼女を使っての写真行為っていうか、写真の『事(コト)』をやってたんだね。恋愛旅行をしながら、やっぱり作り事をしているわけです」として、写真集版『陽子』の解説では、どこが作り事かを詳細に説明している。

桜の森の満開の下

安吾の純情

彼の手の下には降りつもつた花びらばかりで、女の姿は搔き消えてただ幾つかの花びらになつていきました。そして、その花びらを搔き分けようとした彼の手も彼の身体も延した時にはもはや消えていました。あとに花びらと、冷めたい虚空がはりつめているばかりでした。

堕落論

安吾の喝

墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。

政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である。



新潟市長 篠田 昭



人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

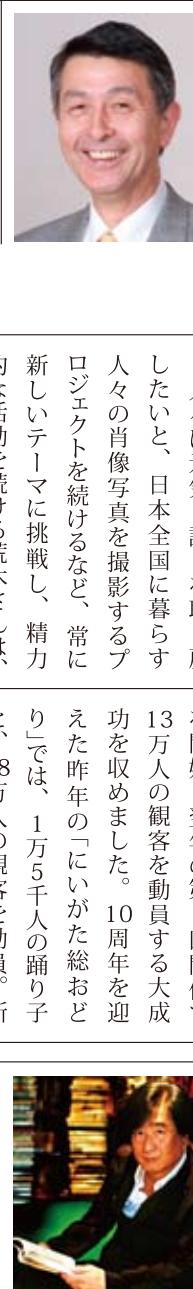
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動していました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を發揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



〈安吾賞の選考を終えて〉

多彩な活動をされ、愛称の「アラーキー」とともに多くのファンを獲得してこられたのはもちろんのこと、ジャンルを問わず多くのクリエイターにも、刺激を与える存在でいらっしゃいます。事物を観ること、写真を撮ることが好きなわち生きることであるという荒木さんの姿勢に、共感する人も多いのではないかでしょうか。

既成の枠にとらわれず、つねに新しい手法に挑まれるとともに、毎日シャッターを切り続け、つぎつぎと作品を発表される荒木さんのバイタリティーは、まさに坂口安吾のバイタリティに通じるものがあると考え、今回安吾賞を贈らせていただきました。

荒木さんは1960年代に広告の世界に入られると同時に、写真家として活躍していました。

80年代にフリーとなられてから皆さんに、心より感謝申しあげます。

人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

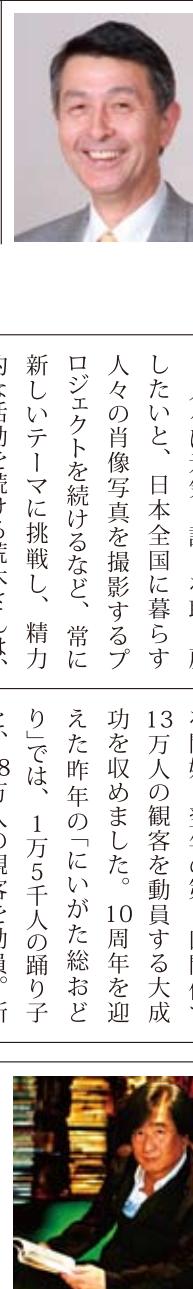
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動していました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



〈安吾賞の選考を終えて〉

多彩な活動をされ、愛称の「アラーキー」とともに多くのファンを獲得してこられたのはもちろんのこと、ジャンルを問わず多くのクリエイターにも、刺激を与える存在でいらっしゃいます。事物を観ること、写真を撮ることが好きなわち生きることであるという荒木さんの姿勢に、共感する人も多いのではないかでしょうか。

既成の枠にとらわれず、つねに新しい手法に挑まれるとともに、毎日シャッターを切り続け、つぎつぎと作品を発表される荒木さんのバイタリティーは、まさに坂口安吾のバイタリティに通じるものがあると考え、今回安吾賞を贈らせていただきました。

荒木さんは1960年代に広告の世界に入られると同時に、写真家として活躍していました。

80年代にフリーとなられてから皆さんに、心より感謝申しあげます。

人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

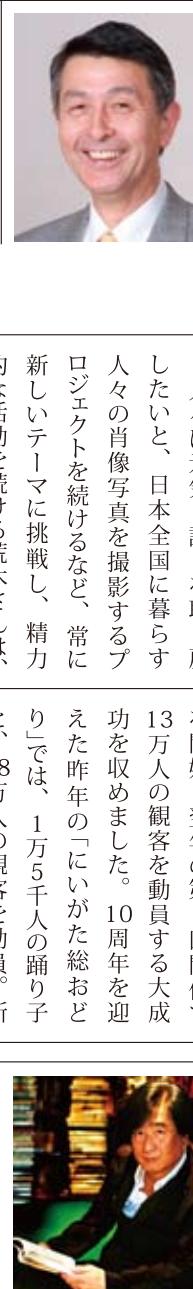
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動ていました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



〈安吾賞の選考を終えて〉

多彩な活動をされ、愛称の「アラーキー」とともに多くのファンを獲得してこられたのはもちろんのこと、ジャンルを問わず多くのクリエイターにも、刺激を与える存在でいらっしゃいます。事物を観ること、写真を撮ることが好きなわち生きることであるという荒木さんの姿勢に、共感する人も多いのではないかでしょうか。

既成の枠にとらわれず、つねに新しい手法に挑まれるとともに、毎日シャッターを切り続け、つぎつぎと作品を発表される荒木さんのバイタリティーは、まさに坂口安吾のバイタリティに通じるものがあると考え、今回安吾賞を贈らせていただきました。

荒木さんは1960年代に広告の世界に入られると同時に、写真家として活躍していました。

80年代にフリーとなられてから皆さんに、心より感謝申しあげます。

人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

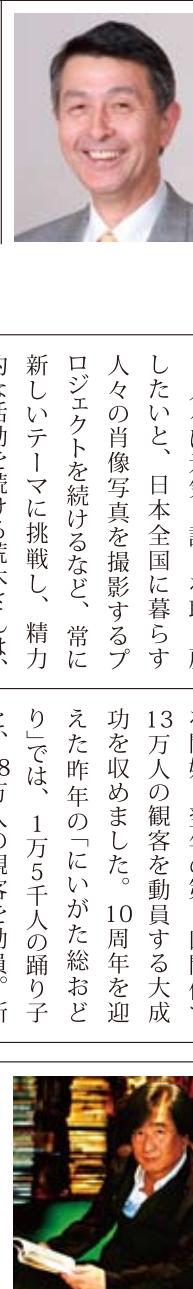
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動ていました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



〈安吾賞の選考を終えて〉

多彩な活動をされ、愛称の「アラーキー」とともに多くのファンを獲得してこられたのはもちろんのこと、ジャンルを問わず多くのクリエイターにも、刺激を与える存在でいらっしゃいます。事物を観ること、写真を撮ることが好きなわち生きることであるという荒木さんの姿勢に、共感する人も多いのではないかでしょうか。

既成の枠にとらわれず、つねに新しい手法に挑まれるとともに、毎日シャッターを切り続け、つぎつぎと作品を発表される荒木さんのバイタリティーは、まさに坂口安吾のバイタリティに通じるものがあると考え、今回安吾賞を贈らせていただきました。

荒木さんは1960年代に広告の世界に入られると同時に、写真家として活躍していました。

80年代にフリーとなられてから皆さんに、心より感謝申しあげます。

人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

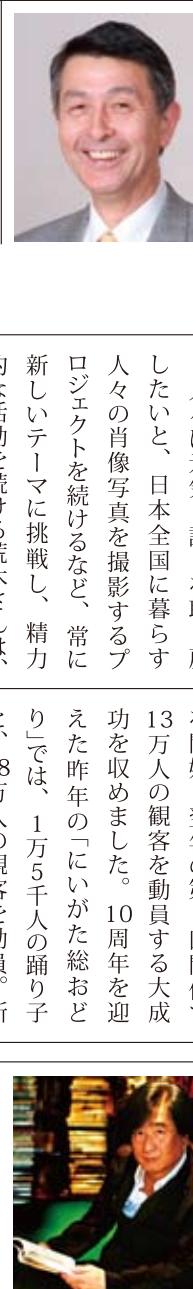
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動ていました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



〈安吾賞の選考を終えて〉

多彩な活動をされ、愛称の「アラーキー」とともに多くのファンを獲得してこられたのはもちろんのこと、ジャンルを問わず多くのクリエイターにも、刺激を与える存在でいらっしゃいます。事物を観ること、写真を撮ることが好きなわち生きることであるという荒木さんの姿勢に、共感する人も多いのではないかでしょうか。

既成の枠にとらわれず、つねに新しい手法に挑まれるとともに、毎日シャッターを切り続け、つぎつぎと作品を発表される荒木さんのバイタリティーは、まさに坂口安吾のバイタリティに通じるものがあると考え、今回安吾賞を贈らせていただきました。

荒木さんは1960年代に広告の世界に入られると同時に、写真家として活躍していました。

80年代にフリーとなられてから皆さんに、心より感謝申しあげます。

人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

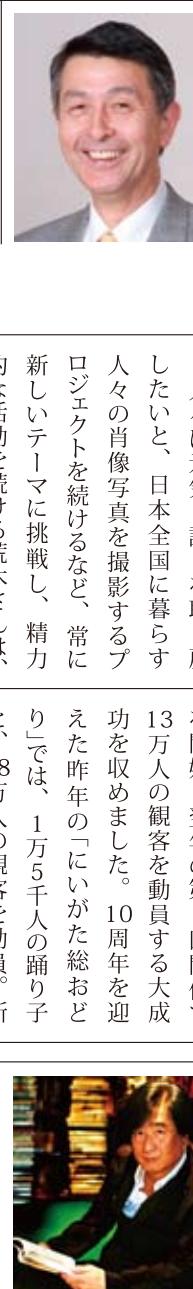
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動ていました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



〈安吾賞の選考を終えて〉

多彩な活動をされ、愛称の「アラーキー」とともに多くのファンを獲得してこられたのはもちろんのこと、ジャンルを問わず多くのクリエイターにも、刺激を与える存在でいらっしゃいます。事物を観ること、写真を撮ることが好きなわち生きることであるという荒木さんの姿勢に、共感する人も多いのではないかでしょうか。

既成の枠にとらわれず、つねに新しい手法に挑まれるとともに、毎日シャッターを切り続け、つぎつぎと作品を発表される荒木さんのバイタリティーは、まさに坂口安吾のバイタリティに通じるものがあると考え、今回安吾賞を贈らせていただきました。

荒木さんは1960年代に広告の世界に入られると同時に、写真家として活躍していました。

80年代にフリーとなられてから皆さんに、心より感謝申しあげます。

人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

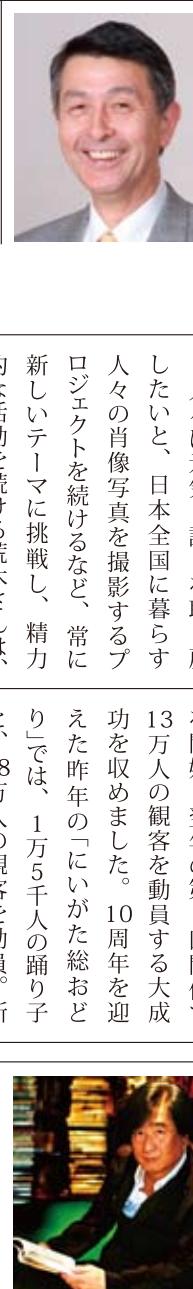
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動ていました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



〈安吾賞の選考を終えて〉

多彩な活動をされ、愛称の「アラーキー」とともに多くのファンを獲得してこられたのはもちろんのこと、ジャンルを問わず多くのクリエイターにも、刺激を与える存在でいらっしゃいます。事物を観ること、写真を撮ることが好きなわち生きることであるという荒木さんの姿勢に、共感する人も多いのではないかでしょうか。

既成の枠にとらわれず、つねに新しい手法に挑まれるとともに、毎日シャッターを切り続け、つぎつぎと作品を発表される荒木さんのバイタリティーは、まさに坂口安吾のバイタリティに通じるものがあると考え、今回安吾賞を贈らせていただきました。

荒木さんは1960年代に広告の世界に入られると同時に、写真家として活躍していました。

80年代にフリーとなられてから皆さんに、心より感謝申しあげます。

人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

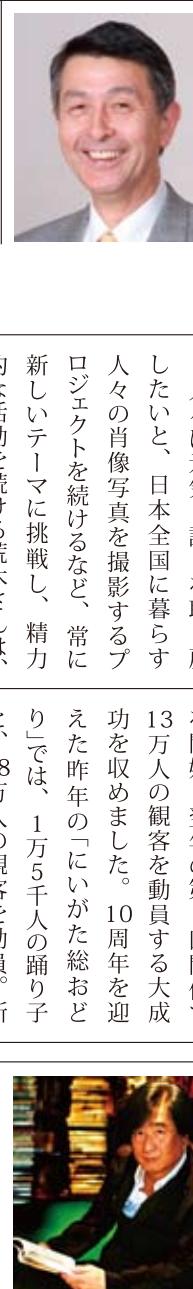
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動ていました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



〈安吾賞の選考を終えて〉

多彩な活動をされ、愛称の「アラーキー」とともに多くのファンを獲得してこられたのはもちろんのこと、ジャンルを問わず多くのクリエイターにも、刺激を与える存在でいらっしゃいます。事物を観ること、写真を撮ることが好きなわち生きることであるという荒木さんの姿勢に、共感する人も多いのではないかでしょうか。

既成の枠にとらわれず、つねに新しい手法に挑まれるとともに、毎日シャッターを切り続け、つぎつぎと作品を発表される荒木さんのバイタリティーは、まさに坂口安吾のバイタリティに通じるものがあると考え、今回安吾賞を贈らせていただきました。

荒木さんは1960年代に広告の世界に入られると同時に、写真家として活躍していました。

80年代にフリーとなられてから皆さんに、心より感謝申しあげます。

人々に元気と誇りを取り戻したいと、日本全国に暮らす人々の肖像写真を撮影するプロジェクトを続けるなど、常に新しいテーマに挑戦し、精力的な活動を続ける荒木さんは、その作品を通して多くの人々に感動と力を与えています。

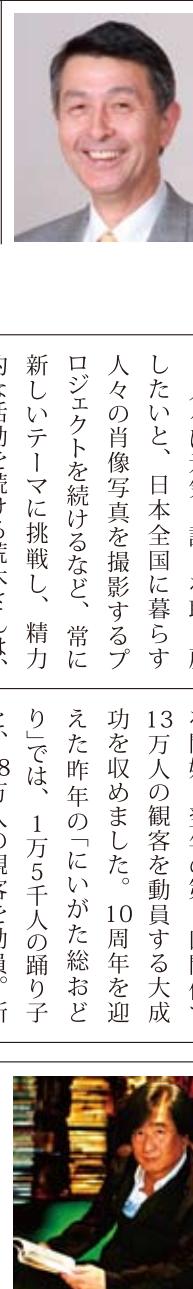
荒木さんの写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、まさに挑戦者魂にあふれ、私たちに勇気や元気を与えてくれるという点で、安吾賞に相応しいと思います。

また、新潟市にゆかりのある方にお贈りする新潟市特別賞は、「にいがた総おどり」の副会長で総合プロデューサーの能登剛史さんを選ばせていました。

能登さんは、平成13年、後世に感動できる祭りを残そうと、数人の仲間とともに活動っていました。

新潟市はこれからも反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する「現代の安吾」に光を当て、安吾賞を広く発信しようと、日常的写真を多く発表し、高く評価されています。

選考委員長 三枝成彰



スケールは違うけど、

気分的に似たところあるかもね。



【略歴】

1940年生まれ。東京三ノ輪（現・東京都台東区）出身。
1963年、カメラマンとして電通に入社。電通を退社後フリーに。1981年、有限会社アラーキー設立。1988年、AaT ROOM開設。
1964年、「さっちゃん」で第1回太陽賞受賞。1991年第7回東川賞国内作家賞、1994年日本文化デザイン大賞、1999年織部賞など受賞多数。日本のみならず海外でも注目が集まり、多くの美術館やギャラリーで展覧会を行う。2008年には、世界的に活躍する芸術家に贈られる、オーストリアの芸術分野における最高位の勳章「オーストリア科学・芸術勳章」受勳。主な代表作に、『愛しのチロ』、『センチメンタルな旅、冬の旅』、『東京物語』、『エロトス』、『花曲』、『写真全集全20巻』、『東京ラッキーホール』、『人妻エロス』、『ARAKI by ARAKI』、『チロ愛死』、『写狂老人日記』、『写真夏2011』等、写真集約430冊。

Anko
AWARDS 6TH

△安五賞△

写真家

荒木經惟

あらき・のぶよし

写真を撮ることは
生活であり、人生。

最後の唯一の身近な愛である、愛猫チロちゃんが死んじやつたりしたこともあるんだろうけど。あっちもこっちもこの世だけど、車の窓越しから見る東京の街があっち側に見えたんだな、『彼岸』としてまとめようと撮つてた時だよ。津波が来て、原発でしょ。でも、アタシの場合はそこに行く資格がないでしょ。行つて何すんの。生まれた時から写真撮つてるんだから、行くと、きっと夢中になつて撮つちゃう。だから行かない！その代わり、自分たちのバルコニーを楽園に見立てて、闇の世界に花を挿げるつづき持ちで『楽園』を撮つた。誰だかわかんないけど、そういうの、見ててくれるヤツがいるんだね。アタシはシャツタ一音が鼓動みたいなもんで、写真を撮ること自体が生活であり、人生。写真是自分をさらして

いるだけでメッセージなんていふけど、安吾賞は、そん

な生き様にご褒美をくれるつていうんだから、嬉しいよ。陰影とか、シャッター、チャンスとか、写真の表現の善し悪しなくてチャチなことじやなくて、生き様つていう基準が、ホント嬉しいよね。

「死」から生み出される「生」への力。

生き続ける、そして撮り続ける。

天才アラーキー被写体との往還

コトバの人でもある。「天才アラーキー、写狂老人、私写真、墨汁綺譚、包茎草日乗、冬恋、写真私情主義、写神、陶景、写真心中、エロトス、空事、クルマド・トーキョー、東京ボーラー、セイ、彼岸…」。いずれも写真集のタイトルだが、本を開くまでもなく読むだけで何かが匂い立つてくる。

天才アラーキーはシャッターは鼓動と同じ、と言う。作品のため撮るのではなく、他者でもなく、同化でもなく、今そこにある「何か」と撞着していく風情である。自分と被写体との間を何度も往還しながら、既成観念から解き放たれてゆく。そこでは世間の規範はギレに消え去って、アラーキーの画



とコトバが誕生し、生き活きと呼吸し始める。その生命力に人々は瑞々しい元気をもらう。アラーキーは一人

たなつて思つてゐるくらい。ネガ・フィルムにキズをつけた『写狂老人日記』は、手のぬくもりや触感から離れていたデジタルへの反逆みたいなもので、破壊しているようにみえて、プリントした画像は、再生とか復興とか、なぜか「生

に向かって面白いわけ。「死」とか、世の中の事件とか、いい女には、ヘコまされるけど、教えられることもあるって、エネルギーもられて、元気づけられるところがあるよね。

荒木 綏惟



【略歴】

1973年生まれ。秋田県能代市出身。
高校生で初渡米、同世代の個性きらめくさまに触発され、18歳でニューヨークへ留学。帰国後、会社勤めの傍ら地域づくりや環境問題などさまざまなボランティア活動を経験。
2001年に現代よさこいの産みの親である國友須賀氏と出会い、共鳴する仲間と「新潟縦踊り祭」を立ち上げ。翌2002年に新潟商工会議所と新潟縦踊り祭実行委員会を開設。世界発信を目指す。

会（会長＝新潟商工会議所会頭）を設立し副会長に就任する。同年第1回新潟縦踊り祭は50団体2500名が参加。2004年には新潟でかつて行われていた盆踊りを現代的に再現しようと新潟下駄縦踊りを制作し県内外、海外でも公演。2010年の第9回では参加者1万3000人、観客32万人、経済効果34億円となる。

たくさんの人々と夢の連鎖で
感動の未来を創りたい。

Anjo
AWARDS 6TH

▲新潟市特別賞▼

「にいがた縦おどり」副会長
総合プロデューサー

能登剛史

のと・たけし



にいがた縦おどりが、10周年の節目を迎えた年に、このような賞を頂き、仲間たちと喜びを分かち合っています。10年前、わずか数人の仲間と夢見たのは、子供たちが本気になれる祭りを作ることでした。仲間と汗を流し、躍動

し、感動を分かち合う場。それが終わっても、仲間たちとの絆と、一つのことへ集中することの尊さを心に持ち続けられる場。それが、私たちの目指した祭りの本質です。

**大切な故郷の未来のために
皆で夢を描く。**

何もないところからのスタート。少しでも夢に近づこうと、ひとりひとりが使命感を持って取り組んできました。一人ではできないことを、仲間と共に乗り越えてきました。気がつけば一人、また一人、想いを同じくする同士が増え、10年の歳月が経ちました。

大切な故郷の未来のために、みんなで力を合わせた祭りが、ふるさと新潟から賞を与えられる。こんなにうれしいことはありません。新潟商工会議所の小嶋一則氏、樽砧の永島鼓山先生、下駄の小林哲男氏、市山七十世先生、激変する経済状況の中で協賛を続けてくれた企業の皆さん、商店街の皆さん、参加してくれた一人一人の踊り子たち。共に祭りを作ろうと立ち上がってくれた同士たち。この

形式張った伝統を安吾は嫌つたが、新潟の下駄縦踊りの再興には眼を細めたのではないだろうか。囃子に使う樽砧には明和義人の逸話もあり、新潟の町衆の心意気のようなものが響いてくる。祭りの再興は、新潟の精神性の再発見ともいえる。雪と酒のイメージをひっくり返す大事件。

夢に向かって一心不乱に疾走する能登氏と、1万人以上が熱狂的に踊る姿は相似形。夢を創ることを夢にした能登氏の挑戦は終わらない。



**能登剛史の夢
安吾も踊る下駄踊り**

形式張った伝統を安吾は嫌つたが、新潟の下駄縦踊りの再興には眼を細めたのではないだろうか。囃子に使う樽砧には明和義人の逸話もあり、新潟の町衆の心意気のようなものが響いてくる。祭りの再興は、新潟の精神性の再発見ともいえる。雪と酒のイメージをひっくり返す大事件。

夢に向かって一心不乱に疾走する能登氏と、1万人以上が熱狂的に踊る姿は相似形。夢を創ることを夢にした能登氏の挑戦は終わらない。

シャイでピュアなアラーキーさんへ



アラーキーさんへ

▼ドナルド・キーン

深い精神世界



第5回
安吾賞受賞

私は写真家の荒木経惟さんのお名前を今回初めて知った。経歴やいくつかの写真を見る限り彼は稀に見る、非常に個性的で精力に充ち溢れた写真家だと思った。作品を見ると、独特な写真群は他人には相似の出来ない、追随を許さない、ある意味不思議な世界であった。しかしそこに内蔵しているものは深い精神世界であったり、時には優しい慈しみを含んでいる。そういうものが見る人の心になにかを訴えかけ感動を与えるのだと思う。世界

安吾は不良に見えるマジメ人間が好きなのです。安吾も私もアラーキーも、この賞をいただいたすべての人々も同じ星からやつてきた人間どうしだと信じます。だまつていても心の通じる仲間です。

どっちが先かわからなければど、年の順なら私が一足お先だけれど、あの世に行って安吾さんに迎えられ、歓迎パーティに招かれたら、うんと呑みましょう。アラーキーが来る時は、安吾さんのうしろに、あなたの奥さまと私が並んで、旗を振って迎えましょう。あ、そうだ、その時の旗の図案を写真で送つて下さい。

お祝いにかけつけたいけれど、二年前からの約束の法話の日で行かれません。

安吾の一粒種の綱男さんにくれぐれもよろしく。天使が人間に化けたような人物ですよ。カーラマンですかからよろしく御教導下さい。私は綱男さんの乳母のつもりです。

帰つたら、今度こそ痛飲しましょうね!!

で、いよいよ私たちの縁と絆は深くなつたよう

に思い、嬉しくてなりません。

安吾は戦後の最も新鮮な革命家でした。

革命と恋は青春の勲章ですが、安吾も、アラーキーも私も戸籍年齢は一向身につかず、いつまでも青春のまま、(あるいは子供のまま)なので、革命と恋はどこに期待したい。

荒木さんの安吾賞の受賞を心から祝福します。

的評価されている荒木さんはまさに安吾賞に値する写真家であり、これから活躍を大いに期待したい。

荒木賞の受賞を

根は生真面目で純情一路です。だから、にせで塗り固めた世間からは、異様なへん人に見られるのです。

安吾も、アラーキーも私も、

革命と恋は青春の勲章ですが、安吾も、アラーキーも私も戸籍年齢は一向身につかず、いつまでも青春のまま、(あるいは子供のまま)なので、革命と恋はどこに期待したい。

▼瀬戸内寂聴



第3回
安吾賞受賞

生真面目で純情一路

親愛なるアラーキーさま

この度は坂口安吾賞御受賞おめでとうございます。私も先年いただいた賞で、とても嬉しく晴れがましかったことを思いだし、アラーキーが受賞されたの



▼野口 健



第2回
安吾賞受賞

「生」と「死」を行き来する

荒木氏が撮影されてきた写真には、これは私個人の勝手な想像ですが、世の中の相反するものが隣り合わせ、若しくはそれ以上の何かを強く感じます。例えばですが、「生」と「死」であり、氏の写真は常にその世界が広がっていると思います。「死」を意識すればするほどに、「生」を意識すればするほどに「死」を意識する、または行き来することによって、日々新たな道を開拓されてきたと推測させて頂いております。

私はどつて、その表現の世界がヒマラヤでの登山であり、歩む道は全く異なりますが、人生の先輩、荒木氏の安吾的な生き様を見習つて、今後も活動を行いたいと思います。

皆さん、いまアラーキーは、借りてきたネコみたいにおとなしくしているかもしませんが、間もなく祝い酒が二三杯入る、無頼派丸出しの男になりますが、その節はよろしく。

▼立花 隆



評論家
ジャーナリスト

きっと安吾は指名する

坂口安吾賞と聞いて、ああ、それは、アラーキーにぴったりだと思った。

アラーキーは平成の無頼派そのものだ。アラーキーがこれまでもらつた数々の賞の中にはいろいろ御大層な賞も沢山あるけれど、ピッタリという意味では、これがいちばんだ。

安吾の写真といえば、林忠彦、中村正也、濱谷浩などいろんな写真家の撮ったものが有名だけど、もし安吾が生きていて、自分が撮つてもらいたい写真家を選べるとしたら、迷わずアラーキーを指名したと思う。

皆さん、いまアラーキーは、借りてきたネコみたいにおとなしくしているかもしませんが、間もなく祝い酒が二三杯入る、無頼派丸出しの男になりますが、その節はよろしく。

[第6回]

安吾賞受賞者信

第6回選考委員会

2011/9/2



様々な意見が交わされた選考委員会



記者会見：左から
坂口綱男氏、篠田昭新潟市長、
三枝成彰選考委員長

明治三十九年（一九〇六）十月二十日、父仁一郎、母アサの五男として新潟市西大畑町に生まれる。（本名・炳五）西堀幼稚園、新潟尋常高等小学校（現新潟小学校）へ進む。大正八年県立新潟中学校（現県立新潟高等学校）入学。この頃から学校にもあまり登校せず、ひとり日本海に面する浜辺に寝ころんで空と海と風と波と光とを絶日眺め思索した。荒漠たる風と日本海の風景は安吾文学の原風景といえる。

出会った人のスナップ写真など日常的写真も数多く発表し、高い評価を得ている。また、その作品を通じて多くの人々に感動と力を与えており、写真に対する強い信念と情熱に満ちた生き方は、挑戦者魂にあふれており、わたしたちに大いなる勇気と元気を与えてくれている」と、その選考理由が語られた。

また、新潟市特別賞について篠田市長は「『にいがた総おどり』副会長の能登剛史さんにお贈りする。平成13年、後世に感動で生きる祭りを残そうと数人の仲間とともに活動を開始、新潟縄踊り祭を立ち上げた。

周 年を迎えた同祭は、28万人以上の観客を动员。新潟に活力を与える一大イベントへと成長させた能登さんは、センセーショナルな写真で注目を集め一方、東京の街並みや、

全国から推薦があつた約70の個人・団体の中から選考が行われた。宣言書にある「権威におもねらず本質を提示するもの」「自らの信念を貫き挑戦し続けるもの」「日本人に勇気と元気を与えるもの」を選考の基本としながら、新しい選考委員のもと、白熱した議論が交わされ、第6回安吾賞は荒木経惟さんに決まった。

記者会見

2011/11/4

受賞者発表会

2011/12/22

篠田市長と三枝選考委員長、安吾のご長男の坂口綱男さんによる記者会見が新潟市で行われた。「荒木さんは、センセーショナルな写真で注目を集め一方、東京の街並みや、

東京都内のホテルにおいて、出版・報道各社関係者などを招き、荒木経惟さん出席のもと受賞者発表会を開催した。当日は、ご友人で作家の森村誠一さんがお祝いに駆けつけ、安吾賞の歴代受賞者である野口健さん、瀬戸内寂聴さん、ドナルド・

キーンさん、そして都立上野高校の同級生、評論家の立花隆さんからもメッセージが寄せられた。

席上、荒木さんは「まわりで見てくっている人がいてくれたことが嬉しい。（安吾は）偉大なる破壊と言つていたけれども、それと同じで、安吾さんが私のどこかを壊してくれて、復活せよと言つていていたけれども、それと生きるか死ぬか、もうちょっと生きるかもしれないな。安吾さんは48歳で死んじやつたというから、その後の人間は俺がもらつたと。どうもありがとう。」と語った。

ク・ラブに陥り、安吾は懊惱し酒場のマダムなどと同棲するデカダンスな生活を重ね、四年後ようやく彼女と袂別を決意。昭和十三年、新たな決意のもと執筆した長編『吹雪物語』は酷評され、安吾は自分に絶望し、転居を繰り返し自らを孤独の淵に置きながら、どん底の淪落の生活を送る。しかし『紫大納言』（昭十五）『木々の精』（昭十五）などの新境地をひらく。

『木枯の酒倉から』を発表。五月『ふるさと』に寄する讃歌、六月『風博士』を発表。牧野伸一が激賞。七月『黒谷村』を発表。島崎藤村などが賛賛し、新進作家として文部省賞（『紫大納言』）が賞賛し、新進作家として文部省賞（『黒谷村』）が賞賛される。昭和七年の夏、新進女流作家の矢田津世子を知り烈しいプラトニック強することにより克服した。

文壇デビュー

昭和六年一月、処女作

『木枯の酒倉から』を発表。五月『ふるさと』に寄する讃歌、六月『風博士』を発表。

牧野伸一が激賞。七月『黒谷村』を発表。

島崎藤村などが賛賛し、新進作家として文部省賞（『紫大納言』）が賞賛される。

昭和七年の夏、新進女流作家の矢田津世子を知り烈しいプラトニック

強することにより克服した。

『木枯の酒倉から』を発表。五月『ふるさと』に寄する讃歌、六月『風博士』を発表。

牧野伸一が激賞。七月『黒谷村』を発表。

島崎藤村などが賛賛し、新進作家として文部省賞（『紫大納言』）が賞賛される。

昭和七年の夏、新進女流作家の矢田津世子を知り烈しいプラトニック

強ることにより克服した。

『木枯の酒倉から』を発表。五月『ふるさと』に寄する讃歌、六月『

安吾賞選考委員



委員長
三枝 成彰
作曲家



副委員長
齋藤 正行
安吾の会世話人代表
新潟・市民映画館シネ・ウインド代表



角川 歴彦
株式会社角川グループホールディングス
取締役会長
株式会社角川書店取締役会長



手塚 真
ヴィジュアルリスト



三好 一美
日本MITエンタープライズフォーラム
理事・事務局長
パイロ エンタープライズ 代表取締役社長

安吾賞推薦人 (敬称略50音順)

青木 邦雄	(財)東日本鉄道文化財団副理事長
青島 健太	スポーツライター
嵐山 光三郎	作家
安斎 隆	(株)セブン銀行代表取締役会長
稻盛 和夫	京セラ(株)名誉会長／稻盛財団理事長
植村 鞠音	著述業
内田 力	(株)コロナ代表取締役社長
梅原 猛	哲学者
荻野 アンナ	作家／慶應義塾大学教授(文学部)
鎌田 薫	早稲田大学総長
川淵 三郎	(財)日本サッカー協会名誉会長
菊池 明郎	筑摩書房代表取締役社長
北川 正恭	早稲田大学大学院教授
小林 幸子	歌手
佐藤 忠男	映画評論家／日本映画学校校長
佐藤 信秋	参議院議員
関川 夏央	作家
高澤 正樹	新潟放送相談役／日本文芸家協会会員
武田 鉄矢	海援隊
田中 里沙	宣伝会議編集室長
檀 太郎	CMプロデューサー／エッセイスト
敦井 榮一	新潟商工会議所会頭
中山 輝也	新潟経済同友会代表幹事
野沢 慎吾	セコム上信越(株)代表取締役副会長
服部 幸應	(学)服部学園理事長／服部栄養専門学校校長／医学博士／新潟市食と花の総合アドバイザー
早野 透	桜美林大学教授
半藤 一利	作家
火坂 雅志	小説家
福武 総一郎	(株)ベネッセホールディングス取締役会長
藤沢 周	作家／法政大学教授
牧 作樹	(株)TVQ九州放送顧問
三浦 末雄	(株)ミヅマアートギャラリーディレクター
三田ジョンストン智子	アルビレックススチアリーダーズ・チーフディレクター
三田村 邦彦	俳優
村松 友視	作家
山口 昭男	岩波書店代表取締役社長
山本 寛斎	デザイナー／プロデューサー

安吾賞賛同者 (敬称略50音順)

渥美 千尋	在アイルランド特命全権大使
泉田 裕彦	新潟県知事
内海 桂子	(社)漫才協会名誉会長
ジェームス三木	脚本家
篠田 正浩	映画監督
瀬戸内 寂聰	作家／僧侶
檀 ふみ	女優
福原 義春	(株)資生堂名誉会長
宮田 亮平	東京藝術大学 学長
(株)旺文社	肩書きは2011年4月1日現在のものです。



第6回 安吾賞授賞式 2012年2月22日 りゅーとぴあ劇場

- 授与式(安吾賞・新潟市特別賞)
- 荒木経惟／スペシャルインタビュー
- 「にいがた縦おどり」デモンストレーション公演

- 安吾賞事務局
〒 951-8550 新潟市文化政策課
TEL. 025-226-2563 FAX. 025-230-0450
E-mail bunka@city.niigata.lg.jp
- 安吾賞 URL
<http://www.city.niigata.lg.jp/info/bunka/ango>
- 坂口安吾デジタルミュージアム URL
<http://www.ango-museum.jp>